

Ursula Renner:
„Die Zauberschrift der Bilder“.
Bildende Kunst in Hofmannsthals Texten.

寺井 紘子

「影響：絵画芸術はわたしの詩作にどのように作用するのか」¹ — 1894年にホーフマンスタールが記したこの覚書に、表現媒体という観点から彼の絵画芸術との関わりを考察することによって答えを見出し、問いと答えの両者を文化的に反照させること、それが2000年に刊行された本書の目的である。

筆者 Ursula Renner は、世紀転換期文学および絵画芸術と文学の相関性を専門とし、1993年の初号から現在に至るまで『ホーフマンスタール年鑑』の共同編集者を務める、いわば生粋のホーフマンスタール研究者である。ホーフマンスタール研究における他の芸術分野との関わりが専ら音楽芸術に集中し、絵画芸術についての考察は十分な成果をあげてこなかった中で、Renner の関心はかねてより、ホーフマンスタールにとっての絵画芸術の意味の探究に向けられてきた。

本書に先立つ数少ないホーフマンスタールの絵画受容研究として、一つには、作者の実際の絵画体験や絵画にまつわる具体的言及からその絵画への関心の表れに迫った Braegger の研究 [1979] が挙げられるだろう。だがさらに、絵画芸術を知覚する、知覚のあり方そのものに着目し、ホーフマンスタールの関心の根源を見つめなおしたという点において、Renner 自身の論考 [1991] が重要な位置を占めている。そこで Renner は、ホーフマンスタールの絵画芸術への接近が、芸術史的な関心からではなく美的体験の関心からのものであること、ホーフマンスタールの絵画体験が根底では、「形象」(Bild) の体験であること、そしてそうした形象がこの作家において「生」の内的体験と外部体験との融合として捉えられ、自らの言語的表現の指針となり得たことを示した。² 本書では、この考察を深めながら、ホーフマンスタールのテキストに絵画的形象がどのように関わっているかが、絵画芸術と文学の相互関係の視点から詳細

¹ Hofmannsthal, Hugo von: *Gesammelte Werke. Reden und Aufsätze III*. Frankfurt a.M. 1980, S.380.

² ここで扱われる具体的な作品は、『道での幸福』(1893)、『夏の旅』(1903)、『帰国者の手紙』(1907)の第4と第5の手紙、そして1916年から17年にかけての遺稿からの覚書のいくつかである。

に論証されている。

本書は八章から構成される。第一章では本書の基本的視座が示され、第二章以下では、おおむね初期から後期へのホーフマンスタール文学の展開に沿いながら、ホーフマンスタールのテキストにおける絵画的形象の機能が具体的に考察されている。

導入部にあたる第一章では、ホーフマンスタールの絵画への接近の経緯と、「間メディア性」(Intermedialität) という本書の基本的視座が述べられている。

Rennerによれば、ホーフマンスタールの絵画芸術への関心は、19世紀に起こっていた歴史主義的な傾向への批判に基づいている。歴史主義的相対化と知覚の直接性の喪失、その結果としての「生」とのかかわりの希薄化 — こうした時代状況に対する危惧は、概念的言語の問題性として、ホーフマンスタールに自身の表現媒体である言語の問い直しを突きつけたのである。そして、概念的言語に對置されうるものは何かという問題意識の中で、彼の関心は他の芸術媒体に向けられ、とりわけ「絵画芸術という非言語的記号体系に一つの答えを見出す」(S.12) こととなった。

Rennerは、ホーフマンスタールにとって、絵画芸術の特性は何よりもその形象性にあったと述べる。絵画の形象は、それを「見ること」において「生」の内的体験を生き生きと可視的に形態化するとともに、ある外部の事実の形象として外的世界との一体化を可能にする。そして、こうしてもたらされた内部と外部の一体化は、時代の中で失われていた個人相互の意思疎通と社会的統合の問題にひとつの可能性を開くものに他ならない。ホーフマンスタールは、こうして自らのテキストにおいても、言語を形象として捉える形象的表現を切り開くことになった。

Rennerはこのように述べ、改めて、形象における内的体験の形態化について取り上げる。そもそも内的体験そのものがすでに、独自の体験ではなく歴史的文化的伝統に媒介されたものであるとして、Rennerは、ホーフマンスタールの直面していた問題が、とりわけ当時の歴史主義的傾向の中での、内的体験の独自性と伝統の重圧との軋轢にあったことを指摘する。それに対するホーフマンスタールの答えが「再生産する想像力」であり、それによって文化的伝統とみずからの創造性を融合させることであった。そうしてホーフマンスタールにとって、他の伝承的テキストの積極的な取り込み — すなわち、「間テキスト性」(Intertextualität) が基本的な手法になったのだ、とRennerは述べる。そして視覚の人間であったホーフマンスタールにとっては、伝承のなかでもとりわけ絵画的形象の伝承が内的体験と不可分なものであり、それゆえに「間テキスト性」の一つとしての「間メディア性」は、ホーフマンスタールのテキストの重要な手法として注目されねばならない。

Rennerは、このような「間メディア性」(テキストの中に絵画的形象が取り込まれること)

の具体的な戦略として、「絵画的形象の引用」「連想」「シミュレーション」などをあげ、その具体的な絵画とのかかわりを第二章以下で考察している。

第二章で Renner は、絵画的形象の体験の叙述を中心に捉えながら、ホーフマンスタール自身が言葉によって二枚の絵を描き出した、1894 年の小品『絵画』(*Bilder*) を、まずは詳細に分析する。具体的には、そこに描き出される生と死のアレゴリーを、モデルとして想定される絵画の幾つかや類似する詩の提示によって浮き彫りにし、アレゴリーを生動化する絵画的形象のあり方を明確にしている。次に、こうしたアレゴリーの生動化が窺える作品として『道での幸福』(*Das Glück am Weg*) を取り上げ、さらにはこの作品に窺える同時代の画家ベックリンの神話世界についての考察が加えられている。そして「視覚的相関的テキスト」(*Visuelle Intertext*) の明確な例証として、このベックリンの神話的形象が深く関わっている『ティツィアーノの死』(*Der Tod des Tizian*) を分析している。

続く第三章では、ホーフマンスタールが絵画芸術の中でもとりわけ強く惹きつけられたイギリス絵画の一派、ラファエル前派が取り上げられ、「画家 - 詩人」とも「詩人 - 画家」とも呼ばれるこの一派における、絵画と文学の融合が論じられる。Renner は、とりわけバーン・ジョーンズの絵画とゲオルゲの詩の親近性を取り上げることによってラファエル前派の象徴性の特性を浮き彫りにすると共に、絵画表現と文学表現がともに、象徴化(記号化)という手法によって、混沌から生き生きとした「生」を創り出す機能を有することを解明する。そしてまさにこの象徴性という点において、ラファエル前派の絵画は、芸術がいかにその構造の中で体験を共通体験として伝達可能ならしめるか、というホーフマンスタールの問いに一つの答えを与えたのだと述べる。

絵画表現及び言語表現の相関的メディアとしての機能は、この後第四章と第五章で、さらに具体性をもって示される。第四章では、『窓の女』(*Die Frau im Fenster*) がダヌンツィオの戯曲を下敷きにするとともに、ミレーの絵画を「身振り言語」として取り入れていることが論じられる。またこの作品に描かれる窓と女性のモチーフの象徴的意味が考察され、絵画芸術の特徴である空間的広がり、本来時間的に展開する文学に取り込まれ、これによって文学に対して空間的な広がり可能性が与えられていることが論証される。また第五章では、『夏の旅』(*Sommerreise*) におけるジョルジョーネの故郷の風景に即して、ホーフマンスタール自身の絵画体験がどのように彼自身の体験と重ねられ、新たな重層的象徴として創造されていったかという、知覚と創造のプロセスが論及されている。

さらに、第六章ではバルザックに傾倒していた彫刻家ロダンが取り上げられ、同じくバルザックを高く評価していたホーフマンスタールの、ロダンへの接近にスポットが当てられる。そして絵画にとどまらない、彫刻の分野における視覚芸術の創造性が、とりわけインスピレーシ

ョンの機能に注目しながら考察されている。

続く第七章ではいよいよ、言語使用の不可能状態に陥ったチャンドス卿と状況を同じくする主人公が、ゴッホの絵画を「見る体験」によって生き生きとした世界との新たな関わりを取り戻すさまが描かれた、『帰国者の手紙』(*Die Briefe des Zurückgekehrten*) が扱われる。そして最終章では、前章でもテーマとされた、「見る体験」における形象を介しての内部と外部の一致の体験が引き続いて考察され、ホーフマンスタールが後年強い関心を寄せたニコラ・プッサンとその神話的絵画世界に即して、ホーフマンスタールにおける、伝統的文化的形象のもとでの内部と外部、個人と社会との統合への志向が論じられている。

Renner は本書において、ホーフマンスタールの絵画との親近性を、根本的に「生」の形態化としての形象性の体験によるものと捉えるとともに、「間メディア性」の視点からホーフマンスタールのテキストにおける絵画的形象との相互関係性を綿密に分析した。「間メディア性」あるいは「間テキスト性」は現代文学理論において一つの定説となっているが、Renner は本書において、ホーフマンスタールのテキストがすでに 19 世紀末の頃からこうした相互関係性を意識的に実践していたことを論証した。その意味で本書は、ホーフマンスタールのテキスト読解に新たな光を当てたものとして高く評価できる。表現媒体の相互連関についての考察は、他のメディア連関の中でも今後さらに発展的に論じられるであろう。

本書はまた、この「間メディア性」を浮き彫りにするために、そこに創り出されたイメージに関連すると思われる絵画を図版として多用している。彼女によって選ばれ、使用された図版はおおよそ 120 点あまりにものぼり、この補助資料によって本書で追究されるテキストと絵画の相互関連性の理解が促されている。ただし、これらの絵画の集まりには Renner 自身の紡ぎ出したイメージが選択的なものであり、また新たに付け加わっていることを忘れてはならない。そこで今度はさらに、Renner のイメージを踏まえた上でホーフマンスタールのテキストに立ち戻り、その絵画的形象性を読み取り直すという作業が我々には要求されるであろう。

(Freiburg im Breisgau: Rombach 2000)

参考文献

Braegger, Carlpeter: *Das Visuelle und das Plastische – Hugo von Hofmannsthal und die bildende Kunst*. Bern 1979 u.a.

Renner, Ursula: *Das Erlebnis des Sehens*. In: *Hugo von Hofmannsthal – Freundschaften und Begegnungen mit deutschen Zeitgenossen*. Hrsg. von Ursula Renner / G. Bärbel Schmidt. Würzburg 1991.